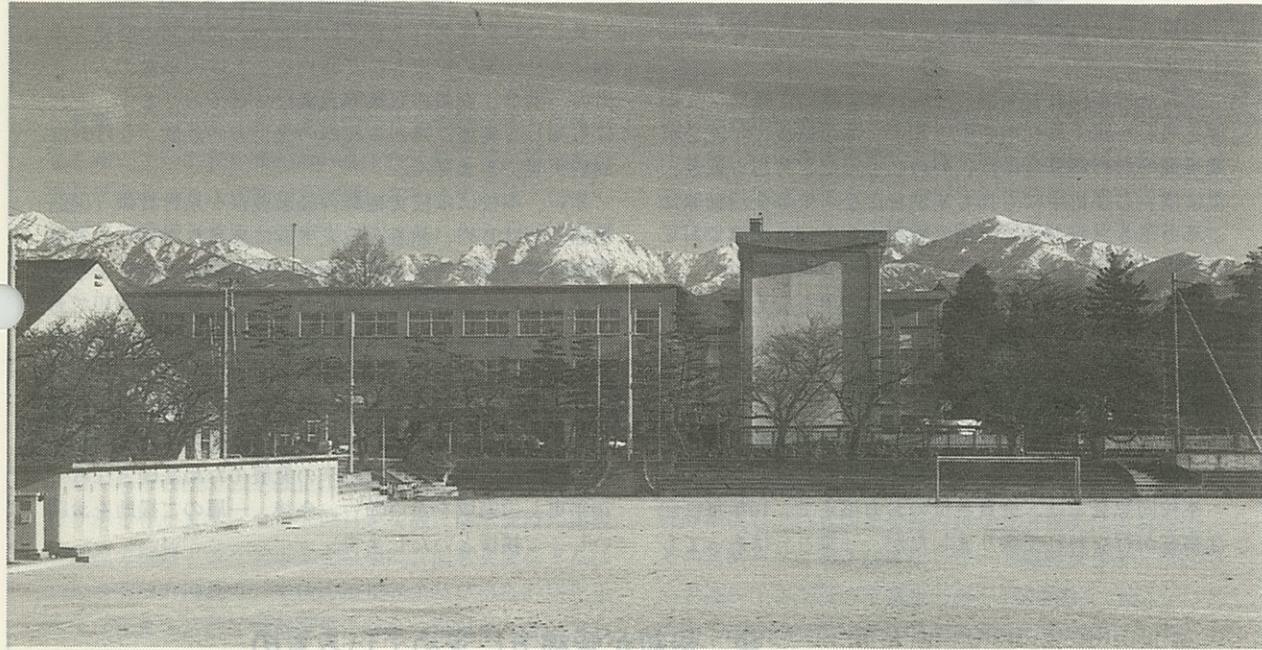


同窓会会報

第36号

昭和63年 春季号

富山県立上市高等学校



近づく創立七十年

同窓会長 藤原 平蔵

現状は厳しく、初期の目標にはいまだ程遠い募金状況のようすがいよいよ田中麗造先生が行来への展望を語る。また、藤原先生が行来への展望を語る。また、藤原先生が行来への展望を語る。

昭和二十三年に教育の大改革が実施されてから幾多苦難の道を辿り、今年は四十年を迎える。これからはより高い識見と、広い視野を兼備した知的生産力をもつ人間の育成が求められています。

富山県は県民あげて、健康とスポーツ、花と緑、科学と文化、三つの日本一をめざしての、活性化の昨今であります。

母校上市高校も、社会の要請に応えられる生徒の育成に、校長、教職員、一体となり全力を傾注されていることに、敬意を表するものであります。

同窓各位には、それぞれの立場で高度化国際社会の現状に対応し、世界に眼を向けての活躍、即ち世界の日本

っぽい始めた母校を長い人生の心の寄り場として今一度みつめ考えて母校の発展のために精一杯の協力を致したいものと心から念じております。

いよいよ上市高等学校も明年は創立七十年の輝しい年を迎えます。同窓会もこれが記念事業の準備にとりかかり、名簿の作成、校史の編纂、同窓会館の建設など、各部門の関係者を始めとして、学校側の協力を得、着々と準備を進めています。

特に人間育成のよりどころとして活用される同窓会館は各位の御理解と溢れる御熱意によって、目的が達成されるので格別の御協力を、お願いします。

会員御一同の御健康と御活躍を祈ります。



号38記念
会
外学部
富山県立

「70年史」の完成を願う

学校長 柳瀬 菊太郎

会員各位には益々ご健勝でご活躍のこととお慶び申し上げます。

平素から本校教育発展のため、陰に陽にご援助、ご指導を賜わり厚くお礼申し上げます。殊に創校70年記念事業推進のための募金には、心のこもったご芳志を戴き、更には、ご多忙中にも拘らず親身になって募金活動等にご尽力下さった方々には深く感謝申し上げる次第であります。

既にご案内の通り昭和64年に創立70年を迎えるのを機会に「70年史」を編纂して本校の生い立ちから現在までの発展の経緯を正しく後世に伝えるのは今日をおいては今後困難であろうと危惧され、何とか実現しようと発議され、61年1月10日「校史編集委員会」が組織され、着々作業が進められている所であります。

本校同窓会では、会員各位のお力添えで、10年毎に記念事業が行なわれて参りましたが、「乗り」はあっても

一貫した校史は発行されていません。70年間の歴史を年表により一連の校史として纏めることは大事業であり、労力、資金、資料の収集等大変なことであります。それにも増して実務に携わる校内の先生方の意欲がなければ到底実現できません。

幸い、本校には校史編纂の経験豊富な泉野教諭（国語担当）をはじめ、熱意ある先生方に恵まれたこと、貴重な資料を提供して下さった方々、いろいろと示唆を与えて下さった先輩各位等に激励されながら鋭意努力しており、8月下旬には校史・原稿執筆及び検討のための合宿を計画し、その纏めの段階に入るところであります。

創立期から今日に至る70年の歴史、その間、幾多の恩師、先輩各位の労苦の蓄積が今日の本校の勇姿であり、この輝かしい業績を偲び将来の発展のため基礎となる「70年史」の完成を希い願い、今後、一層のご援助をお願いし、ご挨拶といたします。

今、母校が皆様方に求めているもの

教頭 中田 進

どんな人であっても、自分の母校がいい学校だと言わることを非常に誇りに感じます。私はこの学校に着任して四ヶ月余りになりますが、同窓生の皆様方の母校にお寄せになる熱い思いをひしひしと感じています。七十年という長い歴史の中で、勤労・自治・向上の校訓の下に築き上げられた校風や伝統を、今在学している生徒たちにしっかりと植え付けていかねばならないと、その責任の重大さを私は痛感しています。

学校には、その生徒のための三か年のフォーマルなカリキュラムがあります。これは社会の変化や人々のニーズに相応して変りますが、他にインフォーマルなカリキュラムといって、その学校が置かれている地域社会の文化的な風土や、その学校が持つ校風や伝統等があります。七十年の歴史や同窓生の皆様方お寄せになる期待もこれにあたります。生徒たちは、このインフォーマルなものも含めて成長します。しかし近年、高等学校は画一的になり、学校の評価もある一面のみでなされる傾向が強くなっています。またそこで学ぶ生徒の多くは、三か年を大学等への進学の足がかりとしか考えない傾向にあります。極端な生徒になりますと高卒資格を得るためにみ

と割り切ってしまいます。これでは、地域社会の文化的な風土や学校の持つ校風とか伝統も人間形成になんら役立たなくなります。

このことを考える時、私たち教師には、このインフォーマルな面を、時代や社会の変化や生徒たちの意識の変化に相応させての再構築が求められます。この時に力強い支援者となるのは同窓会であり、同窓生お一人ひとりであり、また皆様方の母校にお寄せになる教育的な感覚であります。これに耳を傾けながらの教育の再構築であろうかと考えます。つまり、今の学校づくりは同窓生の皆様方に負うところが非常に大きくなっています。どうかこのことを御理解下され、頻繁な来校と生徒への激励をお願いしたいであります。学校は今、クラブ活動の活発化にも意を注いでいます。グランドや体育館に、あるいは実験室や農場に、もっと多くの皆様方がおいでになり、後輩のために声援やアドバイスが頂けることを期待しています。

最後に、私ごとで恐縮ですが、この素晴らしい学校に勤務させていただいていることを本当に幸せに思っております。今後とも宜しくお願ひいたします。

婦人部

『母校の発展を願つて』

真夏日がなくてこのまま秋冷になるのでは?と危惧の念を抱いていた長い梅雨期によくやく終止符が打たれ、今日は久しぶりに太陽の光が輝いています。

同窓の皆様、益々お健やかにそれぞれの分野でご活躍の事と心からお慶び申し上げます。あの太平洋戦争の真っ只中に母校を巣立ってから早や幾星霜を重ねました。

又同窓会の婦人部として発足した会も十周年の節目を過ぎ二十年目への半ばを迎えようとしております。本校も来年は創立以来七十年の記念すべき年を迎える事は誠に大慶に存じます。

七十年は人生で云々正に充実した仕上げの年輪で有ろうかと存じます。この大節目を契機に同窓会館の建設及び校史編纂と云う大事業を目標に、同窓会会长さんははじめ各支部の役員方、本校の校長先生及び担当の諸先生方は日夜募金活動又資料募集に懸命の努力をなさっております。

然し現状は厳しく、初期の目標にはいまだ程遠い募金状況のようござります。

過日支部役員会の席上、柳瀬校長先生が将来への展望を語られた際、同窓会館の建設は必ず実現される事と確信

上市実科高等女学校 第18回(昭和19年3月卒)

藤原トミ子

仰言った中に、現在の高校生徒数が一万九千人であるが十年後には五千人も激減し職業科を含む高校は現在八校有るが、どうしても統合か廃校か半分位に淘汰されるのではなかろうか?と云う予想をお聞きし唚然と致しました。今後は大変な事になる、何としても農業立心の精神に立脚して嘗々発展して来たこの本校の伝統を守り、どうして生き残るかが重要な課題であると云う要旨をお聞きした時、之は安閑としておれない何としても立派な上市高校としての実績を残さなければならないと切に思いました。幾多の優秀な諸先輩の方々が築き培つて来られた本校の伝統の灯を護りぬかなければならぬ。それに今は今推進している同窓会館の設立など確実に実現して、その業績を世に示さねばならないと痛感致しました。

私達が上市高校の卒業生であると胸を張つて誇らかに云えるのは立派な母校の存立があつての事と思います。

在校生の皆さん同窓の皆様、お互い青春の思い出をいっぱい秘めた母校を長い人生の心の寄り場として今一度みつめ考えて母校の発展のために精一杯の協力を致したいものと心から念じております。

本校10年勤続受賞者

●早川昭夫先生

●山本洋子先生

●穴口幸雄先生

●富樫勇夫先生

思 い 出

（前編）

卒業50年

（後編）

「50年の思い出」の原稿を依頼され、過ぐる年月の早さを感じてゐます。50年前の純情多感な少年時代の5ヶ年間桜の並を通りぬけ通学した日々が、走馬燈の如く脳裏を駆けめぐってくる。今これを整理しようとするとき、恩師や学友の顔が、その時の行事と交錯していく。

そのうち、特筆大書するものもありますが、今回は学校の四季の行事について記し、時代の流れを回想して見ると……

- | | |
|--------|--|
| 春 新学期 | 毎年教科書のインクの香りと共に、今年こそと思いを新たにし校門をくぐる。 |
| 田 植 | 肥田家、富士日家等々10ヶの農家名の責任田を割当され、これを管理し、又神？田の田植等も行なう。 |
| 養 蚕 | 当時は養蚕は主要科目で、専門の先生も在職され、夏と秋に養蚕室に一日宛合宿した。 |
| 旅 行 | 修学旅行は例年関東、関西を通例としていたが我々は九州方面へ旅行した。今でも雄大な阿蘇山景は忘れられない。 |
| 夏 勅論大会 | 各級より代表選手を登壇させ、弁士の所感に深い感銘を覚えたものである。 |
| 海 水浴 | 夏休み直前、滑川海岸和田の浜において、約一週間実施された。東方約1km |

出

（後編）

（前編）は50年前の卒業式の模様を記す。卒業式は、子供たちの笑顔が印象的で、その中で最も印象的のは、卒業生の手で作成された「学園の四季」の歌詞である。歌詞は、卒業生の手で作成された「学園の四季」である。

上市農学校（第16回（昭和14年3月卒））

第一本科 金川浩一

（後編）のところに滑川高女も海水浴を行っておりました。また、

勤労奉仕 支那事変も日につれ長期化し、これかたため、軍事教練の強化に相俟って、銃も手に付ける。後体制も強化され、我々も白萩千石で、民宿じ、砂防工事の勤労奉仕をした。

秋・豊年祭 農産物の品評会に併せ即売会も行なわれ、農産加工品として「カルビス」（学校名アルプス）ヘチマ化粧水等が好評であった。又この日は露天体操場で、全校生徒の会食会があった。

冬・勉狩 松原野、眼目山一帯にかけ、全校生徒挙げて勉狩を行なったが、獲物数は少なかったと記憶する。

写真交換 先輩、同級生と夫々手札写真を交換したもので、小遣の大部分がこれに充てられた。

以上主なものを例記したが、その他に、校友会の総会、夏季実習、運動会、球技大会、寒稽古、野菜花華の販売、測量実習、演習林の枝打、等々、夫々の思い出がある。

まさに少年期から青年期移行、時代の一こまであり、夫々感慨新たなものがある。

未筆乍ら他界された旧友のご冥福を祈り、生存学友の益々のご健康を希い、筆を擱く。＊

卒業40年

『第一回生の想い出』

田中 朝一

昭和18年4月当時（入学時）県立上市農林学校第二種一年同級生は5余名の採用に数多い受験者で、今日此頃の様な倍率では無かった。現に私達の年に成らて初めて皆さん（同級生の）が優秀な人材であったか、社会が評価をしてくれている。當時私達の青春は戦争に役立つ人を造る養成所でもあったと考えられる。「統制術」の上手な先輩は多く県大会に出場して優賞も数多くあったが、私達は丁度昭和20年8月15日午後零時の天皇の終戦のお言葉もラジオから聞き深く落胆した日の事も又忘れる事の出来ない出来ごとの一つになっている。原爆の投下長崎、広島にと米軍がぐり返し富山市も昭和20年8月1日夜B29が来襲して翌々日から私達も焼跡整理に出かけた。（学校から鍼をもって）大変な暑い日でした。

入学当時毎日朝礼が行われ、その日の天気によって野外学習と言つて実習（丸山農場行き）と決定されていた。

当時は1反歩の烟は大変広く各班1~5班迄ありました

卒業30年

『三十年前』

今にして思う事、私くし達は三十年前「人格の完成はスポーツから」実際スポーツマンの瞳の色は明るく輝いている。しかもその明るい瞳の中にはいつもファイトが燃えている。精神統一、身体の健康を守ってくれる野球に明けくれていた思がする。

その時の事を、思いおこして見よう。

われ等の野球部は、多少な雨の中にでも毎日毎日白球をむこうに追いかながら練習練習をかさね、汗まみれになるまで実施していたのを思い出します。試合では勝利の神に従うことができず、負けた時のさみしさ、また悲しさは、何んのたとえようもなく、泣くにしても泣ききれぬ程の残念な想いでいた。しかし、過去の苦心が水の泡となつたのではなく、今までの努力を充分に正々堂々と発

上市高校 第1回（昭和24年3月卒）

農業科 上 樂 信 二

が、私は魚津から通学していたので第5班でした。班員11名であったと記憶している。入学当時の丸山農場は甘藷の造りが日課であった。私達の先輩が丸山農場（松林を切り松の根を堀り起こし。入学当時は2メートルに1箇も松の根があり敏造りに大変苦労したことを今懐しく想い出されてならない。

◎上級生を2年間続いた。農林学校の時と、新制高校3年生の2回、上市高校になる前に専攻科として3年間程女学校を卒業して1年間農業を習う予定でお姉様方が50名程通学されたことも、又、上市高校としての1ページであったと想われる。

◎新制高校になり、女の生徒が在校する様になってから農業科の男子学生は好ましくない「恰好は悪い」生徒は出来て来た。私達はお蔭様で同期に女性はいなかったので、余り気にもかけなかった。

上市高校 第10回（昭和33年3月卒）

普通科 広 井 昌 一

押したのではないか。公明正大にスポーツマンシップを發揮したのではないか。といってみんな心をなぐさめるより他はなかった。「勝負は時の運」とあきらめつつ後の反省をして見て、いろいろな場合に対する処置や相手の心理状態を研究して、いっぽしの経験を積んだような気もしないでもなかった。今、思い出されるのは、当時の部員の顔、そして監督の顔ばかりです。

私の上高時代はほんとうに野球野球の毎日で終わつたような気がしています。

卒業20年

『上高は母校』

先日、仕事をしながらラジオを聞いていると、エレキギター、ギンギンのなつかしい歌がはいった。ふつ！と20年前を思い出した。

先生の目を気にしながら、エレキギターをならして、何かを言いたかった自分、ツイギーに代表された、ひざ上20cmの超ミニスカートをイメージしたあの娘、更衣室の独特の白い中から乗りこんだ、上高発・丸山農場行きのみどり色のバス、ナスの苗を1本植えては、「ビール1杯」とつぶやいていた先生。冬休みの宿題のこもをかかえ、路線バスから降りるのに苦労していた時、さりげなくだまって手伝ってくれた先輩、などなど、際限なくあの頃の事が思い出された。

卒業10年

光陰矢の如しと申しますが、上市高校に入学そして3年、卒業して早10年と言う歳月が経ちました。

私が思うに、人はある時点に立つとき、そこには、必ず過去と未来を結ぶ歴史的な存在としての自己を見出さないわけにはいかない。そして過去の力が有形無形のうちに現在の自分とかかわっていることを覚えるときそれは伝統理解の第一歩となる。学校生活においてもまた然り。しかし、高校生活を可もなく、不可もなしと過ごしてきた私にとって、さて、在学中の思い出について、なにかを書こうとすると、特に書きたてるものがないようと思えてくる。それでいて、人と人の付き合いと言うと無性に懐かしいのだからどうかしている。

上市高校 第21回（昭和44年3月卒）

農業科 石原 明

久しぶりに上高の前に立ったけど、すぐに同化してしまいそうな気がした。少しの校舎の変化は関係なく、すぐ農場や農舎が気になつたが、やっぱりナスが植わり、トマトが実っていた。長い夏休みの途中に学校に来た様な気がした。自分の青春がここにあったし、ここから社会に巣立った。自分の人生の出発点の母校だから、こんな感がするのだろう。

あれから20年。もうみんなは、社会にあっても地域にあっても、又、家庭にあっても期待され、責任のある年になってきた。

自分も『勤労・自治・向上』の校訓をしっかりと理解し

上市高校卒業生らしくありたいと思う。

上市高校 第31回（昭和54年3月卒）

農林工学科 竹田 亮成

私のクラスは、普通科と違って、1年から3年までの一貫した、特色ある教育姿勢で、1年から3年まで同じメンバーである。そのため一人ひとりの性格、癖、考え方、家庭環境に至るまで、諸々のことかいやでもわかってくるし、お互いに腹の底から語り合えたので、みんな懐かしい思い出となっている。石原、梅、金本、林、藤原、松本……。ひとりひとりの顔がはっきり目に浮かんでくる。

最後に卒業してもうすぐ10年、第一線で活躍中であろう級友諸氏の顔を想像しつつ、今後ますますご活躍されることを期待し、母校の発展を願うものである。